＜今朝の聖書から＞

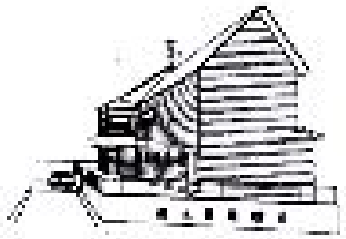
【黙示録】聖書箇所は、久しぶりに黙示録になります。この聖書の名は教会だけでなく、いろいろのところで用いられることがあるようです。最後の日を予言したり、不吉な結末であったり、恐怖や妄想を示そうとして使われることが多いようです。けれども、教会はここに全ての人の完全な救いが啓示されていると理解します。天地の創造が物語として創世記において啓示されているように、救いの全てが、特に２１章の“わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった”で始まる部分は天国の姿を示しています。その姿は、私たちがどんなに強く救いを求めていても、なかなか理解できないところがあります。丁度、バベルの塔の出来事を経験するまでの人々が“違う言葉を使う人がいる”とは一体どういうことか想像できなかったし、ノアの洪水の時までは“動物を食料にする”とは一体どういうことなのかが分からなかったのと似ているでしょう。

【ヨハネ】聖書の名前にもなっているこのヨハネは、使徒ヨハネだと広く理解されています（私ヨハネと４回記されていますし、主イエスとの関係も見られます）。その証の為にパトモスに島流しにされ、そこから最初に出て来るように、７つの教会にこの書を手紙として記しました。次に時代ですが、教会が迫害を受けていた時代、すなわち AD５４－６８のネロの時代などと考えられます。違う説もありますがそんなに違いはありません。宛先は小アジア（トルコ）の七つの教会ということが記されていますが、全ての教会に書き送られ、全ての信仰者に必要とされたものと理解しましょう。“象徴や幻”を超えて語られる、救いへの道が“現状の悪と神の世界”という形で示される、教会に必要な確信の書物であったのです。

【封印】封印が解いていかれるように、天の姿が明らかになっていますが、その通らなければならない道も示されています。今朝の箇所は、六番目の封印が解かれた後に明らかにされる光景を示しています。７：９“この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って”と世界の教会を示しています。どんなにか勇気の源となり安心を与える言葉から始まっていることでしょう。今はそうではないのです。国と国とはキリスト教会がそこにあるのに争い、言葉の違いが、基本的なものに思えるほど大きな妨げともなります。そうではないというのです。いつもの聖餐式において、神の前で主が伴われる絶えることのない救いを大切にしましょう。

週　報

２０１０年　１０月　１７日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☏054-345-4070　　E-Mail grace@big.jp

振替口座　00890-6-214042